

第二部

わたしの選ぶ一冊

:再話して欲しい物語り

## まだ幼かったあの頃

久留島 歌穂

わたしの選ぶ一冊

『小公女』 フランシス・ホジソン・バーネット (1849-1924) 【アメリカ】

大学生活にも慣れて夏休みに実家に帰ると、昔よく読んだ童話や絵本が段ボールの中に収納されていました。今となってはもう読む人がいないからなのでしょう。懐かしいと感じながら昔のように何冊か手にとって読み始めました。そのとき読んだ中の一冊が、今回取り上げた『小公女』の本でした。

私は幼い頃、よく本を読む習慣がありました。幼稚園ではもちろんのこと、家でも就寝時間を過ぎてから親の目を盗んでは本を読んでいた。家にたくさんある本の中で一番好きだった本がこの『小公女』でした。絵本だったのでイメージも湧きやすかったのか、「お金持ち」や「宝石」といった自分とはかけ離れたものに憧れを抱いていました。またセーラ的人格もとても気に入っていて、「セーラみたいに優しい女の子になりたい！」とよく思っていました。今思えば、セーラの裕福で幸せな生活の部分にだけ焦点を当て、貧しい生活を送っていた頃のセーラを、自分の中で自然と物語の中から排除していたのかもしれませんが。もしくは、『小公女』の伝えるメッセージを理解するには幼すぎたのでしょうか。

裕福だけれど母のいない家庭、突然の父の死による孤児への転落、学院長や友人からのいじめなど、『小公女』という一つの物語には様々な背景が織り込まれています。小学校・中学校・高等学校と学校生活を送ってきた今なら、『小公女』の裏に隠された背景を意識して物語を読めるのではないかと思います。

貧しくても常に優しい心を持っていたり、いじめられても明るく優しい心を忘れなかったり、自分が辛いときでも相手を思いやる気持ちを忘れなかったり…セーラは物語の主人公だから理想的な人格であると言ってしまうとそれまでで、現実世界とはかけ離れているかもしれないけど、『小公女』のセーラの生き様は逆境に生きる子供たちに、勇気と励ましを与えてくれるのではないかと思います。

大部分の物語はハッピーエンドが約束され、『小公女』もそのうちの一つですが、ハッピーエンドに辿りつくまでが本当は大事なのではと思いました。『小公女』だけでなく、数多くの物語には何かメッセージがあると思います。幼少の頃は単純に「楽しい」「羨ましい」といった感想しか持てないかもしれませんが、大人になって再度物語を読むとき、幼少の頃にはわからなかった、物語が伝えるメッセージを理解した上で物語を楽しめるのではないかなと思いました。

今回のレポートで児童文学の深さを実感できました。昔読んだ童話や絵本をもう一度読んでみたいのです。

## オバマ政権になった今、もう一度、読み返してみたい 『アンクル＝トムの小屋』

加賀谷茉莉子

わたしの選ぶ一冊

『アンクル＝トムの小屋』 ハリエット・ピーチャー・ストウ 【アメリカ】

幼い頃、私は、「本」と名の付く物ならどんなジャンルでも大好きだった。可愛らしい童とともに歩いた『エルマーの冒険』、『長靴下のピッピ』で裸馬に跨った船長のお転婆娘になり、『小さなスプーンおばさん』で小さな森の世界に飛び込んだ。小さな星の不思議な世界『星の王子様』、『赤毛のアン』でアンとギルバートの意地っ張りな恋の行方に胸躍らせ、マシュウの死に涙した。『アルプスの少女ハイジ』で、アルプスの雄大な自然や暖炉の前で焼く蕩けるチーズに憧れ、『トムソーヤの冒険』でペンキ塗りに挑戦したくなった。母の50冊にもおよぶ世界文学全集は、私の夢の世界への始まりだったのかもしれない。

その中で、アメリカ文学シリーズは、『あしながおじさん』『小公子』『小公女』など本も読み、テレビでマンガも見てはまり込んだ作品が多い中、『若草物語』では、戦争に、体の強くない父親が従軍牧師としてでもアメリカ南北戦争に行く中での話であること、特に『アンクル＝トムの小屋』は、奴隷制度その物について書かれている悲しい話であることから、歴史や政治の要素があまりにも強く素直にのめり込めなかった記憶が残っている。

『アンクル＝トムの小屋』とは、どのような物語かというと、

「正直で真面目のクリスチャンである奴隷のトムが、ご主人の借金の為、家族や友だちから離されて、遠くの農場で酷い目に遭いながら独りぼっちで死んでいく。その死に際に、昔の坊っちゃんがトムを買い戻しにやって来るが時すでに遅く、全身を痛めつけられたトムは、その痛めつけた相手を「お気の毒な旦那様。わし、心から、貴方を許しますだよ。」と言いながら、どんな時も運命を恨むことなく死んでいった。トムを弔ったジョージは、やがて自分の奴隷達を一人一人自由な身の上にしてあげ、二度と奴隷を持つまいと誓った話しをし、トムに感謝をしつつ、奴隷だった人々にも正直なクリスチャンになるように話した。」という内容であったと記憶している。

小学生だった私は、「奴隷」って何？召使いがいることなのかなあ。いい暮らしをしていたら、お金を持っていたら、何でも思い通りに出来る生活って、ちょっとうらやましいかも…。今の日本には、白とか黒とか皮膚の色で人を差別したりはしない。しかも、同じ民族が相手を虐げたり、差別をしたり、物同様、売り買いをすることができるなんて、何て酷い国なんだろう。同じ人間を区別するなんて、恐ろしいことは嫌だ。私は、召使いと呼ばれる人がいるようなすごく裕福な暮らしではないけれど、そんな世の中に生まれなくて良かったと思った。

でも、知らず知らずの間に、無知から人を私自身も区別していたのだろう。ペンなどたくさん持っていない友だちに「買ってもらえばいいのに」。様々な体験や学習ができにくい知り合いに「どうして～できないの。」悪気はなかったのだが、自分にとって当たり前のことが必ずしも世間の価値観で無い事が解らず、人知れず人を傷つけた。自分の筆箱を盗まれた

ときにも、もしかしたら、自分の態度が原因だったのかもしれないと、今は思える。

辛い生活の中で「感謝」の心、「慈悲」の心を忘れないトム。祖母のまつられているお仏壇に毎日、ご飯や頂き物をお供えする時に手を合わせるくらいの宗教観しか無い私には、キリスト教の心、神を信じ続け、誰をも分け隔て無く愛する心を持つトムの生き方は、胸が熱くなるというより、とても不思議な感じだったのだ。

ただ、こんな辛く悲しい物語の中で、私の心に残ったのは、そのことに反対した人がいた。黒人が立ち上がったのではなく、16代アメリカ大統領リンカーンを筆頭に白人と言われる人たちの中にいたことだ！

アメリカは、「民主主義の国」と国民自らが叫び、世界の平和は、アメリカが守っているかの如き昨今の政治状況であるが、それは、きっと、この『アンクル＝トムの小屋』の時代から培われた精神なんだろうとも思えてならなかった。

今、アメリカは、オバマ氏が黒人初の大統領となり、政権交代が行われた。白人だから、黒人だからと言うことは、人としては全く関係のない事ではある。しかし、今も世界中、あちらこちらで、姉が旅行するときでさえ、「白豪主義」を感じることもあるらしい。黄色人種であるアジア人の中の日本人である私達。その中で、純然と未だ残る、白人社会と黒人社会の貧富の差。スパニッシュ、ジャップ、アラブ系など民族意識は、私たちの世界が異民族国家の集合体で有り続ける限り消えることはないのである。

この夏休みにまた、アメリカは9.11のテロの日を迎えた。イラク紛争は、終結を迎えそうにもなく、民主党に政権交代した日本は、自衛隊による海上での給油作業を止めようとしている。北朝鮮は、自国の利益のため、核開発を武器にし、世界に驚異を振りまいている。8月、韓国を旅したとき、たまたま、金大中元大統領が崩御された。広場では、その死を悲しむ若者が、インタビューに答え、若い徴兵で警察官になっている若者が、警備にあたっている姿を目にした。一国の元大統領の死に、多くの国から、使者が送られ、平和外交がなされていた。その中に、そのことを痛む？もしくは、利用する北朝鮮代表の姿もあった。

私は、今、姉と共にリュックを背にドイツを旅している。その時、財布から何気なく取り出す「ユーロ」という紙幣ができた経過を思い出すにつけ、今一度、世界はこの「ユーロ」の誕生のように、経済的にも、人道的にも結びつくことは出来ないのだろうか。もちろん自国の利益は、大切である。人は、生きていかねばならないのだから。できれば、困らないように、裕福に生きたいのは当たり前のことであろう。しかし、それでは、世界はきっと、私たちが年取ったときには、壊れ去ってしまう。今、何を求めようとしているのか、考え直さなければいけないのではと考える。

政治に疎く、このように課題を与えられなければ、日々、世間のことに関心を持とうとしない私であるが、この世界を見るにつけ、考える心を持たねばならないと感じている。幼い頃に読み、人の差別意識の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、富を持つことの傲慢さから、ずっと心に馴染まなかった作品『アンクル＝トムの小屋』を今一度、読み直してみたい。今なら、昔より何か感じ取れる物があるかもしれない。感じ取らなければならないと思っている。

## 『モモ』が教えてくれた時間と意識と心

島田 愛

### わたしの選ぶ一冊

『モモー時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語』  
ミヒヤエル・エンデ 【ドイツ】

### あらすじ

ある街の円形劇場の廃墟に年齢も素性もわからない一人の女の子がやってきた。彼女の名前はモモ。彼女はみすばらしい格好をしていたが人の話を聞く能力にたけていた。彼女に話を聞いてもらおうと、心が穏やかになるのだ。彼女はたちまち街の人々にとってなくてはならない存在になった。

しかし、ある日街に灰色の男たちがやってきた。彼らは人の心を巧みにあやつって、ゆとりや暇は時間の無駄使いであることを街の人々に教え込む。人々は灰色の男たちの組織、時間貯蓄銀行に口座を開いて自分たちのゆとりの時間をどんどん貯蓄してゆく。それにつれて余裕のある生活ができなくなり、心も貧しくなってしまうのだ。

モモは灰色の男たちの存在と陰謀を知り、周りの人々を助けるため時間を取り戻す旅に出かけた。

この物語は、私が初めて読んだ長編小説です。もともと本を読むのが好きだった私に、母が薦めてくれたのがきっかけでした。

『モモ』は児童書でありながら大人にも人気がある本で、日本も含め、全世界で翻訳されて読まれているベストセラーです。1987年に映画化もされているので、本が苦手人はそれを見てもいいかと思います。

当時小学生だった私には時間とは何かなどわかりませんでした。内容を完全に理解でいたわけではありませんでした。ただ漠然と、時間は大切にしないといけないんだなあ幼心に感じたことを覚えています。

今回この本を選んだのは、当時わからなかった時間についてもう一度考えてみようと思ったからです。

まず、本を読みなおしてみても、これは子どものための童話であるけど、子供のころのような時間の感覚を忘れつつある大人のための童話であるということに気がきました。何のために時間があるのか、時間を節約することでいったい何を得るのか、これは私たちの感性が毎日の忙しさに鈍ってしまったせい かわからなくなっているものです。実際、物語の中でも街の異変に気付いたのは子供達で、大人は灰色の男たちの思うまま、時間の節約に追われています。

1976年に発表された作品にも関わらずまさに現代社会が悩むべき病気をテーマにした作品で、小学生の時には見えなかった、現代社会の在り方への痛烈な風刺が、畳み掛けるような文、こまやかで美しい独特の世界観、無色でさびしい町の描写のなかに見てとれます。

時間の国に住み、時間をつかさどるマイスター・ホラがモモにこう語りました。

「人間はじぶんの時間をどうするかは、じぶんできめなくてはならないからだよ。・・・時計というのはね、人間ひとりひとりの胸のなかにあるものを、きわめて不完全ながらもまねて象ったものなのだ。・・・人間には時間を感じとるために心というものがある。そして、もしその心が時間を感じ取らないようなときには、その時間はないもおなじだ。」

これは秒、分、時で区切られていても、それはあくまで物理的なものであり、時間というものの本質は人の意識、心にあるということではないでしょうか。

ミヒヤエル・エンデはここで、時間は意識であるということを読者に伝えているように思えます。

例えば、食事にかかる時間を30分から15分にしたとします。これは一見すると時間を節約したように思えるかもしれませんが、しかし、その15分が意識、心に残らなければ無意味なものです。栄養を取るという点では意味があるけれど、意識の点では存在しないものと同じです。こういう風に時をすごせば、物理的時間は節約できたことになるのかもしれませんが、意識という時間のレベルで言うと何も残っていません。

たとえ食事に30分かけたとしても心に残る食事が出来たとしたら、それは意識を大事にしたということになり、つまりは時間を大事にしたということになります。

時間＝意識＝心なのです。

周りを見まわしてみてください。時間を奪われた人達がたくさんいるのが見えます。自分もその一人かもしれません。私はこの本を、今を忙しく生きている人に読んでほしいと思います。たくさん情報や物に流されて生きているなかで、時間がなく、あってもやることばかりで、時間があつという間に過ぎていくと感じる人々に。時間がたりないといつも感じていて、何もしないと取り残されていくような、そして忙しく動いても、やりがいがなく、退屈だと感じる人々に。

そして、子供のころのような縛られない時間をもう一度思い出してほしいと感じました。

## いつからか本を読まなくなった自分

山内 映里

わたしの選ぶ一冊

『ハリー・ポッターと賢者の石』 J・K・ローリング (1965-) 【イギリス】

私は小学生の頃は本が大好きで、昼休みになると必ず図書室へ行って本を借りていた。読書感想文に応募して表彰されたこともあった。しかし、今は全くと言っていいほど本を読んでいない。なぜこんなにも本を読まなくなってしまったのか。

中学生の頃、朝の時間に読書時間が設けられていたので家にある本を持って行って読んでいた。好んで読んでいた本は、『“It”と呼ばれた子』のようなノンフィクションの作品だった。3日で読み終えた本もあった。テレビドラマ化された本も楽しんで読んでいた。家では小学生の頃からはまっていた『ハリー・ポッター』シリーズを毎日楽しんで読んでいた。魔法使いという現実離れた設定がとても興味を引くものだった。

しかし、受験間近になると、塾が忙しくなり、読む本も参考書ぐらいになった。それからあまり本を読まなくなり、国語の先生から読んだ方が良いと言われるほどになっていた。高校生になると、更に本を読まなくなった。高校3年間で読んだ本は数えるくらいしかないだろうと思う。クラブ活動が忙しいという理由はあったが、一番の原因は本のおもしろさを忘れてしまい、読むこと自体が億劫になってしまったからだ。

しかし、今年になって『ハリーポッター』シリーズの最終巻が出て、家でも取り合いになっていた。私はこのシリーズだけは読んでいたのだが、昔ほど楽しんで読んでいたわけではなかった。もう一度始めから読み返そうと思い、『ハリー・ポッターと賢者の石』を読み出した。一週間ほどで読み終え、今はこのシリーズは7巻全て読破してしまった。夏休みには2回目に突入した。同じ本を2回読みたいと思ったのは初めてだった。

本ってこんなに面白かったのだなと思ひ返させてくれたのがこの一冊だった。最近は文学作品は読んでいないが、東野圭吾のミステリーにはまっている。ファンタジーとは違ったドキドキ感やヒヤッとしたところがとても面白い。今考えると、『ハリー・ポッター』に出会っていなかったら、面白さを忘れたままで、今は本などというものは読んでいなかったらと思う。

## 私にとっての本

石田麻純

わたしの選ぶ一冊

『星の王子さま』 サン＝テグジュペリ (1900-1944) 【フランス】

私はよく「星の王子さま」という題名を聞いた。昔に一度読んだことがあったけど、内容が全然つかめませんでした。何か独特の世界のなかのお話のようでした。

だから、また機会があれば読んでみたいと思いました。

\*\*\*\*\*

私が小学3年生の時に先生がよく絵本を読んでくれました。その読んでくれた絵本の中で、記憶に残っている絵本は「ずーっとずっとだいすきだよ」や「あらしのよるに」です。

「ずーっとずっとだいすきだよ」は特に好きでした。

男の子と犬のエルフィーは仲良しで、一緒に大きくなりました。男の子の背が伸びるにつれて、犬のエルフィーは太って動きも鈍くなりました。犬は人間よりも歳をとるのがはやいから。ある朝、男の子が目を覚ますとエルフィーが死んでいた。男の子は悲しかったけれどもみんなよりは気持ちが楽でした。なぜならそれは、男の子は毎晩寝る前、エルフィーに、「ずーっとだいすきだよ」といってあげていたからでした。家族のみんなもエルフィーが大好きでしたが、好きとやってやらなかった。いわなくてもわかっているとおもっていたからでした。

私はこの物語を読んでもらって、すごく悲しかったのを覚えています。

愛するものが死んでしまうのは、とても悲しいなと思いました。

もし毎晩大好きだよと言ってあげてなかったなら、悲しさも倍増するだろうと思う。死んでしまってから言ってあげなかったことを後悔するのは、余計に悲しいだろうと思う。

口にだして伝えることも必要なんだなと思います。

この絵本は悲しいけど、なんだかあったかいなと思いました。

私は本を読むのがあまり好きではないです。分厚い本や、小さい文字を見ただけで読みたくなくなります。でもおもしろそうだな、いいなとおもった本は自然に読めます。

読んだ本がよかったら「おもしろいなあ、本っていいな。」とも思います。

小学3年生のときに読んでもらった絵本を、今でも覚えているということは、その絵本が私にとって大きなものだったのかもしれない。

そんな物語と出会えてよかったなと思います。

本は読む人に新しい考えやいろいろな知識を与えてくれると思います。

だから本はすばらしいものだと思います。



## 今になって改めて読んでみると・・・

杉本結衣

わたしの選ぶ一冊

『エルマーのぼうけん』 ルース・スタイルス・ガネット (1923-) 【アメリカ】

私が小学校2年生のとき、母が『エルマーのぼうけん』という童話の本を買ってきてくれました。私は小学校低学年の頃から活字を読むのが嫌いで、もちろん、本を読むのも大嫌いでした。特にファンタジーや冒険物が好きではなかったのですが、母に「面白いから読んでみ。」と言われ、いやいやながら読んでいたのを覚えています。予想通り、あまり文章の意味が理解できなかつたし、まったく興味もわかず、面白みも感じられませんでした。

一方、2歳下の弟は、とても面白かったみたいで、何度も何度も繰り返し読んでいました。私にはそれが理解できませんでした。

しかし、大学受験が終わってからすぐ、何気なく本棚にある『エルマーのぼうけん』を手にとって読んでみました。すると、なんと面白いこと！！どンドン物語の中に引き込まれていったのです！！夢中すぎて20分程で読み終わってしまいました。

いじめられているりゅうを助けるために、誰も生きて帰ってくることが出来た人はいないという“どうぶつ島”へ、命を賭けて行ったエルマーの勇敢さに、とても心を打たれました。そして、旅の途中でいろいろな動物たちと遭遇し、数々の試練を乗り越えていく様子もすごくかっこよかったです。私もその冒険心と度胸を見習いたいと純粋に思いました。将来、子供ができた時に、是非読ませたい一冊です。本当にこの『エルマーのぼうけん』の面白さに気づくことが出来て良かったです。

このちょっとした体験から感じたことがあります。18歳で小学生向けの童話やファンタジーを読んでも十分楽しむことができます。むしろ、大きくなってからもう一度読めば視点も変わると思うので、その10年前には分からなかった面白さなどを深く味わうことができるかもしれないし、気づくことができなかった登場人物の心情なども、より深く理解することができるようになっていないか、と実感しています。幸い私の家には弟が2人いるため、本もたくさんあるので、時間があるときには新鮮な気持ちで、子供向けの本も読んでみたいです。最近の恋愛小説や推理小説や漫画ばかり読むのではなく、こういうのもいいなと感じることができた素晴らしい日でした。

## 『先生は魔法使い？』との出会い

桑野愛美

わたしの選ぶ一冊

『先生は魔法使い？』 オトフリート・プロイスラー 【ドイツ】

私は小さい頃から本が大好きで、何時間もひたすら本を読んだり、図書館でたくさんの本を借りたりなど、その頃の遊びといえばもっぱら読書であり、そんな私にとっては本屋が一番の遊び場だった。到着するや否や児童書のコーナーへ一目散に駆けていき、「帰るよ」と言われるまでひたすら気に入った本を立ち読みしているような子どもだった。

この本と出会った時のこともよく覚えている。それは、私が祖父母と本屋に出かけた時のことだった。祖父と本屋に行くと必ず本を何冊か買ってもらえたのだ。私はいつものごとく本屋中を歩き回り、自分の欲しい本を物色した。しかしその日はなかなか気に入った本が見つからず、私はとても焦っていた。そしてついに、祖父から「帰るよ」という言葉が発せられてしまい、思わず私はすぐそばにあった一冊の本を掴んで「これを買って欲しい」と頼んだ。その本こそが、この『先生は魔法使い？』だったのだ。

帰りの車中で私は激しく後悔していた。何も考えず手にした本は、これまで私が好んで読んでいた本と文字の大きさや挿絵のタッチなど、どこことなく雰囲気異なっていたからである。そもそも題名の最後にある「？」って何だ、とも思っていた。けれどもせっかく買ってもらった新しい本だ。私は恐る恐るその本のページを開いたのだった。

この本を読み終えた私は、あの時これを選んで良かったと思った。とても面白かった。その年の夏休みの宿題にはこの本の読書感想文を提出した。それほどまでにこの本は面白かったのだ。

残念ながら、今この本は手元にない。この機会に読みなおそうと探してみたのだが、見当たらなかったのだ。そのため断片的にしか覚えていないけれど、主人公の先生は指をパチンと鳴らすと、小さくとも抜群に効き目のある魔法を使うことが出来た。当時の私は自分も魔法が使えないか、と指を鳴らす練習をしたものである。

前述のとおり本が手元にないため、物語の結末がどうだったかは定かではない。しかし幼い私が満足できる結末であったことは確かである。今度は結末を知るために本腰を入れて本棚からこの本を探してみようと思う。

## 不滅の探偵シャーロック・ホームズにあこがれて

高瀬千鈴

わたしの選ぶ一冊

『緋色の研究』 アーサー・コナン・ドイル (1859-1930) 【イギリス】

アーサー・コナン・ドイルの名をはじめて知ったのは日本でもおなじみの少年漫画「名探偵コナン」より、シャーロックホームズという名の探偵を主人公とした推理小説を書いた著者であると知った時だ。シャーロックホームズという名の探偵が推理小説の中にいることは知っていたがアーサー・コナン・ドイル自体の小説を読んだことは今まで一度もなかった。そこで今回のこのような機会を利用してホームズシリーズを読んでみることにした。

アーサー・コナン・ドイルのシャーロックホームズシリーズはどれも名作といえる作品であると思うが、今回私が紹介するのは彼の最初のホームズシリーズである「緋色の研究 (A Study in Scarlet)」だ。

舞台は19世紀のロンドン。シリーズの中で語り手となっているワトソン医師はアフガニスタンの戦線で負傷し、ロンドンへ戻ってきたのだが下宿先を探している途中知り合いから同居人を紹介される。その同居人こそがシャーロックホームズであり、そこから二人の名コンビが誕生する。ホームズは初対面でワトソンがアフガンから帰国したということ当ててしまう。一体このシャーロックホームズとは何者なのだ？ワトソンは疑念を抱きながら最初の一週間をホームズと一緒に過ごす。そしてその正体が明らかになった。彼は私立探偵だったのだ。そんなある日ベーカー街の刑事レストレイドの要請を受けて乗り出したのは空き家で殺されていたアメリカ人の謎であった。この男は一体誰か？犯人は誰か？現場に落ちていた結婚指輪の意味は何なのか？今、名探偵シャーロックホームズの推理が展開されていく！

著者、アーサー・コナン・ドイルは当時眼科を開業していたのだが思うような評判を得ず、持て余した時間でさまざまな短編小説を書き始めていた。そんな中書かれた長編小説こそがこの作品「緋色の研究 (A Study in Scarlet)」であった。ドイルはこの作品に大なる自信を持っていたが当初は意外にもどこの出版社も原稿を受け入れてくれなかった。というのもエドガー・アラン・ポー以降、ミステリー小説界にまったく進展がなかったため、ミステリー小説は受け入れられにくい現状であった。しかしその後、スコットランド誌から短篇小説が発表されるようになると、ホームズの人気は一気に上昇し、高い人気を獲得するようになった。

アーサー・コナン・ドイルが医師だったこともあり、ワトソン医師というホームズの助手的な役割が生まれたのであろう。もし、私が実際にホームズの世界に飛び込むことが出来るのであれば私はワトソン医師になりたい。確かに実際自分の手で事件を解決したり謎を解いたりするのは快感であり達成感のあふれる思いを得るかもしれない。しかし私はそんな天才的な名探偵をそばで見たいと思うのだ。自分には天才的な洞察力や観察力はないが常にそばで見ていることによって、自らの推理力を向上させ、また時としてはホームズに事件の解決の鍵となるものを助言する。そんな役割を果たす位置につきたいと思うのだ。

そうは言っても題名にもあるように私は本当にシャーロックホームズに憧れている。初見で相手の職業や健康状態などを見抜けるのは実に素晴らしいし、かっこいいと思う。私も彼のようにはなれなくてもそれに近い、例えば洞察や観察を意識し、常に好奇心を持ち何かに没頭できるようになりたい。そうすることによって人生の楽しみ方が増え、自分の向かうべき場所の選択が広がるように思うのだ。

「考えることを怠るな。」これはシャーロックホームズシリーズを読んできて私が彼に教えてもらったことだ。

## 『it』が自分だったなら…

米澤友里佳

わたしの選ぶ一冊  
『itと呼ばれた子』 ディヴ・ペルサー

わたしは幼いころからあまり本を読むことが好きではなく、好んで読まなかった。この本に出会ったのは、中学生のころだった。朝の読書の時間に何人もの友達が読んでいたことで影響を受けたからだ。

内容は、子どもが虐待され、その虐待が除所にエスカレートしていくというものだ。最初は「That Boy (あのこ)」と呼ばれていたがそのうち「it(それ)」と呼ばれるようになる。食べ物も与えてもらえず、奴隷のように働かされる毎日をすごしているのだ。決しておもしろい内容ではないが作者の実体験ということで読んでいて先が気になってしまう本で2日ぐらいで読み終えた。涙もでるくらいひどく残酷な内容だった。

今何気なく毎日、親に名前を呼ばれているが、それが急に「it(それ)」と呼ばれるようになったらどうなるのだろう…なんて考えると、今がどれだけ幸せなのかとか改めて感じることができた。あたりまえのことなのに、そのあたりまえがないこの作者の気持ちを考えるだけで今でも涙がでそうだ。この本は幼児期の話で実際少年期やその他2冊発表されている。私はどうもこの続きは読みたいとは思わず今も読まないままである。きっと、さらに酷い虐待をされるのだから読む気にもならない。

3冊読む必要はないと思う。しかし、読んだことがない人は一度幼児期の話だけでも読んでみてほしい。また、ただ読むだけでなく、いろんなことを考えて今を生きていることの幸せにもっと気づいてほしい。

このように本から気づかされることはたくさんあるのでこれからはもっとたくさんの本を読もうと思う。

## ただ悪党と思っていたシャイロック

原田 悠来

わたしの選ぶ一冊

『ヴェニスの商人』 ウィリアム・シェイクスピア (1564-1616) 【イギリス】

私がこの名作に出会ったのは小学6年生の時だ。年に一度の舞台発表会で私たちのクラスは担任の提案でこの『ヴェニスの商人』を劇にし、披露することとなった。ここで話を進めるにあたって登場人物と物語を簡単に紹介したい。

ヴェニスの商人には主に、正義感が強く情に厚い商人であるアントーニオ、アントーニオの友人である高等遊民のバサーニオ、バサーニオと後に結婚し莫大な財産を相続した貴婦人のポーシャ、強欲なユダヤ人金貸しであるシャイロックが登場する。舞台はイタリアのヴェニス。バサーニオは富豪の娘ポーシャと結婚するために資金が必要である。そこで、彼は友人のアントーニオにお金を借りようとする。しかし、アントーニオの財産は航海中の船に積まれており貸すことができない。友人想いのアントーニオは悪名高いユダヤ人の金貸しシャイロックに頼む。貸すにあたっての条件は「期限までにお金を返せなかった場合は、アントーニオの肉1ポンドをシャイロックにわたす」というものだった。簡単に返せると確信があったアントーニオは契約書にサインした。だが、不運なことに航海中の船にあるアントーニオの全財産は難破により失われた。

その間に、バサーニオは晴れてポーシャと結婚することができ幸せの絶頂だったが、アントーニオが返済できなくなったと知らせが届く。バサーニオはポーシャからお金を受け取りアントーニオのもとへ、ポーシャも密かに動き始めた。バサーニオはシャイロックへお金を返済しようとするが、シャイロックは受け取りを拒否しアントーニオの肉1ポンドを要求した裁判を引き起こす。この裁判は一人の法学者によって裁かれることになっていて、実はこの法学者が変装したポーシャであったのだ。アントーニオの肉1ポンドにこだわるシャイロックについてポーシャは肉を切り取ってもいいと判決を下す。悦んで切ろうとするシャイロックにポーシャは「肉は切り取っていいが、契約書に記載されていない血一滴でも流せば契約違反で全財産没収。」だと。諦めたシャイロックはバサーニオが持ってきた金を要求するが認められない。またアントーニオの命を奪おうとした事による財産没収は慈悲によって免除され死刑も免除となるかわりにキリスト教に改宗された。最終的にアントーニオの財産を乗せた船は無事だったことがわかり、和やかに終わる。

最初に劇の台本と実際の本を読んだとき私はとにかく、アントーニオが無事でよかった、ポーシャのあの明言はすごい、全てがシャイロックの思い通りにならなかったことが意外であったし、うれしかったのを覚えている。極悪であったシャイロックが最後少し不幸になってもよかった程、ただ悪者と認識していた。実際、劇でも私は裁判官のポーシャを演じてあの明言を言うときに「この悪党が」と気持ちが自然に入った。

しかし、今回本を読んだりネットで調べたり数年ぶりにヴェニスの商人に触れてみると、驚いたことにシャイロックを悲劇的人物ととらえる意見が多い。なぜなら、シャイロックはユダヤ人であるからだ。差別され、そのことによってアントーニオに自分の商売の邪魔をされて恨みを募らせていたのだ。差別されていたなら恨みがあるのは当たり前だ。おまけに貸したお金は戻ってこないし、結果的には免除になったが死刑や財産没収の件もあった。私はシャイロックについて知って彼の視点から考えると、だんだんこの本を読んだ当初とは違う気持ちになった。シャイロックをただの悪党とは思えなくなった。確かに、アントーニオの肉1ポンドなんて常識的に考えたなら条件にしないだろう。だが、歴史的背景など考慮するとシャイロックの気持ちもわからなくはないと気持ちに変化がでてきた。

私はこのヴェニスの商人という一冊の本から、今と昔では考え方の違いが生じ知識を得るとストーリーや登場人物のとらえ方が変わるおもしろさを教えてもらったのでこの本を選んだ。

## 『秘密の花園』バーネット

矢下 紗織

わたしの選ぶ一冊

『秘密の花園』 バーネット

インドで生活していたイギリス人の役人の娘メアリーは、両親をコレラで亡くし、イギリスのヨークシャーにすむ伯父のクレブン氏に引き取られることになった。

始めはわがままで嫌な子どもだったメアリーだが、女中のマーサやその弟ディコンとの交流によって子どもらしさを取り戻していく。

領主であるクレブン氏の屋敷には、数多くの庭があったが、奥様の庭だけは、閉ざされていた。クレブンは妻を愛していたが、その最愛の妻が庭の木から転落して亡くなったからだ。

メアリーは、クレブンが捨てた庭の門の鍵を探し出し、庭を探そうとする。そんなある日、ついにその庭園の入り口の鍵を見つけた。そしてとうとう庭の入り口を見つけ、その庭に入る。庭園は荒れていたが、メアリーはそこがまだ生きていることを感じた。

メアリーは誰にも知られずにディコンと二人だけでこの秘密の庭園を以前のような花園へ蘇らせることに喜びを見出す。またそれと同じ頃に、メアリーは、彼女に秘密にされていた伯父の息子コリンと出会う。彼は生まれたときから病弱で、ベッドからほとんど出たことがなく、メアリーと同様に両親から愛された記憶のない少年だった。

三人は秘密の花園の中で交流を深めていき、コリンはすっかり元気な男の子になる。

そんなある日、コリンは父と再会し、明るく笑いにあふれる日々を取り戻し、メアリーとディコンも、ますます仲良く幸せに暮らしたのであった。

## 『若草物語』のジョーと私

宮崎 菜津子

わたしの選ぶ一冊

『ハムレット』 ウィリアム・シェイクスピア (1564年～1616年) 【イギリス】

私は本をよく読む子どもではありませんでした。読書に興味を持ち出したのもここ数年のことですが、その中でもはじめの頃に読んだ本が『若草物語』でした。若草物語では、母親や父親を子ども達がみんな心のそこから尊敬しているところや、家族が仲良くそして一生懸命生きているところ、さらには家族の死など胸をうたれるシーンがほんとうにたくさんあります。さらに楽しく愉快的シーンもあり、家族愛や、一人一人の女性の素敵さがえがかれているので、『若草物語』を好んで読んでいました。そしてその中でも印象に強く残っているのがジョーという少女です。私は、物語を読むときに登場人物の誰かに自分を重ねたり、感情移入して読んでしまうタイプで、それがこの本ではジョーでした。ジョーは、男まさりではあるが、女性としての芯の強さがある素敵な女性で、物語の中では、唯一女らしいといわれていた自慢の長い髪を家族のためにあっさり切ってしまう。そんな私には絶対にできないようなまねをすんなりとやってしまったり、いつも明るく元気なジョーに憧れていたのを覚えています。今考えても私の憧れる女性像はあまり変わっていないなあと感じることができるので、昔の私のことも思い出せます。また、この本は、悲しい現実直面する部分もありますが、幸せな希望に満ちた家族が描かれてる部分が多かったと、ほんとうはどうだったかはわかりませんが、そんな記憶があります。私自身そのような作品を好んで読みます。何年も前に呼んだ若草物語を、最近読み返してみたいと思っています。また、『続若草物語』なども読んで今の自分がどう感じるかなども知れたらおもしろいなあと思います。

そして私が、最近読みたいと思っているのがシェイクスピアの『ハムレット』です。幸せや希望とはうってかわって悲劇や復讐、悲しみが主な内容のハムレットをなぜ読みたいかというと、まず単純にシェイクスピアの作品を以前から読んでみたいと思っていたことが理由の一つです。世の中ですごく評価されている文学作品を読まないのはもったいないと思ったからです。また、悲劇の中に生きる力や希望などもあったりして、自分自身の考え方などに影響を与えてくれる作品なのではないかと思ったからです。また、昔は内容だけを把握したり、感情移入してしまっていました。今では、読書をするたびに自分の考え方に影響があったり、客観的に物語をよんで、いろいろと考えさせられたりできるようになりました。読書というのは、自分自身が実体験ではできないことを知ることができたり、多くの人間の考え方などにふれたりできるため、生きるためにかかせないものだと思います。自分自身ももっと素敵な人間になれるような文学作品にもっと出会っていきたいと思います。

## 初めて出会った推理小説

杉田晴加

わたしの選ぶ一冊  
『幽霊列車』 赤川次郎 (1948-)【日本】

わたしは小学生の頃、本を読むという習慣なんてまったくなく、家でテレビばかり見ている子だった。頭もどちらかというとな賢くなく読書には縁遠い暮らしをしていた。そんなわたしが中学校に上がる時、わたしの家で大掃除をしたことがあった。すると、押し入れから母が若い頃読んでいた本がたくさん出てきた。わたしにくれるというので、最初は暇つぶしに読もうかなという感じだった。そこで手に取ったのが、赤川次郎の『幽霊列車』だった。しかし、予想以上に黙々と読んでいる自分自身に気がついた。母もやけに静かなわたしに驚いていたほどだった。中学生のわたしが推理小説のおもしろさを理解していたのかどうかは分からないがその本に夢中になっていたのは確かだった。

以前から探偵物のドラマやアニメには興味があったのだが、文学を通して触れることはこれが初めてだった。本をあまり読んだことがなかったわたしにとって、文章を読み進めていくだけでストーリーが頭の中に浮かぶ現象に感動した。しかも、推理小説ということで先が見えそうで見えない何とも言えないもどかしさがわたしを夢中にさせたのだと思う。

中学校3年間のうちで、母がくれた赤川次郎の推理小説約10冊も読み終わり、それから受験のために本を読む機会がなくなった時期があった。そして、高校に入り自分で本を買うようになった。しかし一冊買うのにお金が結構かかり、2ヶ月に1冊という程度でしか買えなかった。

そんな時母はわたしに、違う作家の本も読んだ方がいいと言った。ちょうど読書感想文を書かなければならない時だったので、それをきっかけに違う作家の本を読み始めるようになった。そこではまってしまったのが伊坂幸太郎の本である。この本は、兄に貸してもらった。兄も伊坂幸太郎の本を何冊か持っており、いくつか貸してもらっては黙々と読んだ。どの本も物語に吸い込まれるようで飽きがこなかった。本を読んだ後は余韻に浸ってしまうのが常である。すぐには現実には戻れないからである。

本というのは自分の考え方が変わるきっかけになるすばらしいものだと思う。今でもあの『幽霊列車』を読んだ時の感動は忘れられない。本当に母があれらのたくさん本を捨てていなくて良かったという気持ちでいっぱいである。また、他の国の推理小説も読んでみたいと思う。新たな感動に出会えるかもしれないから、推理小説だけでなく色々なジャンルの文学に触れてみたいと思う。



## 『チャーリーとチョコレート工場』 ：それは読み聞かせから始まった

田村 絵果

わたしの選ぶ一冊

『チャーリーとチョコレート工場』 ロアルド・ダール 【アメリカ】

私が小さい頃は、本や絵本は好きでしたが、自分で読むことは嫌いでした。なので、母が読み聞かせをしてくれる幼稚園の頃はたくさんの物語に触れていましたが、小学生になるとめっきり減ってしまいました。読むことが嫌いというよりは、自分で読む本がおもしろいと感じられなかったのです。しかし、小学校4年生のとき、急に自分からハリー・ポッターを読みたいと思いました。これが凄くおもしろかったのをきっかけに、私はどんどん小説にはまっていきました。

中学生になり、図書室の物語を読みあさっているうちに、表紙の作絵が同じ雰囲気のもの共通しておもしろいことに気付きました。この頃わたしは作者の欄を全く見ていませんでした。5冊ぐらい読んだところで、作者が共通していることに気がつきました。その作者がロアルド・ダールでした。

ロアルド・ダールの物語にでてくる主人公はいつだって素直でいい子です。それに対照して、敵だったり他の登場人物にはひねくっていたり、悪い考えを持つ奴がいます。その表現の仕方は、とてもブラックが効いていて、子供向けの物語の表現ではない気がします。しかし、子供には新鮮で、それが面白くてたまりませんでした。とくにチャーリーとチョコレート工場にでてくる、5人の子供のうち、4人はとてもしつけのなっていないような子供たちです。45年もの前に書かれた物語であるのに、わがままで自分の思いどおりにいかないと気が済まない子、ゲームの世界には入りすぎて現実が見えない子など、現在でも問題となっていることを、おもしろおかしくかいている所が凄いいと思います。

ロアルド・ダールの作品の中でもやはり、チャーリーとチョコレート工場が一番好きでした。チョコレートや飴玉、チューイングガムなどのお菓子を作る機械は想像するだけで、目がキラキラ輝くような構造でした。ウンパルンパの踊りや歌の歌詞に魅了され、こんな工場が本当にあればいいのにと思いました。

そんなことを思っているひとが、ハリウッドにもいました。ティム・バートン監督です。彼はジョニー・デップと共に、チョコレート工場を映像化してくれました。この予告を聞いたとき、私は興奮して友達と喜びを分かち合いました。映画は、ロアルドのブラックを残し、かつユーモアたっぷり。映像はとてもカラフルな色彩で、私が想像するよりも華やかな世界でした。ウンパルンパの踊りと歌は、作った人を天才だと思いました。DVDを買っておまけにダンス講座があったので友達と覚えたぐらい好きになりました。

本でも、映画でも大好きな物語『チャーリーとチョコレート工場』は、私の大好きな世界です。いつか本当に板チョコから金色のチケットが出てきてくれることを信じて待っていようと思います。

## 私を“本好き”にした思い出の一冊

田村 絵果

わたしの選ぶ一冊

『ドリトル先生航海記』 ヒュー・ロフティング (1886-1947) 【アメリカ】

私がこの本と出会ったのは、小学一年生のときでした。この頃の私は、分厚い本を読むことにあこがれのようなものを抱いており、何か読み応えのある本を探していました。そんな時に母が薦めてくれたのがこの本です。もともと私は生き物が好きだったので、さまざまな動物の言葉がわかり、会話ができるドリトル先生がすぐに好きになりました。また、訳を書いた人が井伏鱒二で文章が簡単で分かりやすく、当時6歳の私でも簡単に物語の内容が理解できたのも、私が読書好きになった理由の一つだと思っています。

この本に出会ってから私は小学校の図書館に通い、『ドリトル先生』シリーズの続編をはじめ、『ファーブル昆虫記』や『日本昔話』などのページ数の多い本をどんどん読み、読書に親しむようになりました。そのおかげで文章を読むことに慣れ、知識をたくさん増やすことができました。もしこの本を読んでいなければ、まともな文章があまり読めない、本嫌いな人になっていたように思います。本当に出会えてよかったと思っています。

## 『フランダースの犬』を読んで気づいたこと

大西麻子

わたしの選ぶ一冊

『フランダースの犬』 ウィーダ【イギリス】

私がこの作品と初めて出会ったのは小学校4年生のときである。この作品を読むまで本を読むこと自体まったく興味がなく、テレビばかり見ていた。この作品は当時担任だった先生が薦めていたものだ。最初はなんとなく読んでいたが読みすすむうちにどんどんこの作品に引き込まれていく気持ちになったのを覚えている。物語の舞台はフランダース地方の小さな農村となっていて、主人公とそのおじいさんと飼い犬の3人の物語である。貧しい家で暮らし、仕事がなくなり事件の濡れ衣を着せられ最後にはみんな死んでしまうというとても悲しいお話である。私が本を読んで泣いてしまったのはこれが初めてだった。貧しく生きながらもいつも希望を持ちつづけ夢にむかってつきすすむ主人公の姿にとっても感動した。主人公は画家になることを夢見ていた。私も昔から絵を描くことが好きだったので共感できる部分も多かった。この作品を読んだとき自分がいかに幸せで何不自由ない生活を送っているのかということを実感した。本当に贅沢な生活をしていたのだと気付いたのだ。この物語は実話ではないが、この作品が書かれた当時はこのように貧しい子どもがなくなることは珍しくなかったのだ。今となってはこのようなことはほとんどない。ほとんどないが、世界中を探せばまだまだ貧しい人や苦しんでいる人はたくさんいる。幸せな時代になったからこそ自分の人生をありがたく思って生きるべきだと思う。

この写真は実際に舞台となったアントワープにある主人公のネロと飼い犬のパトラッシュの像である。

この物語を読んだ後、友達から日本で描かれたアニメもあると聞きアニメも全部見てしまった。話の内容は知っていてもやはり感動してしまった。そしてそれからは本を読むことに興味を持つようになった。『フランダースの犬』は私が本を好きになったきっかけになったのだ。

今、私は小学校の教員を目指している。最近の子どもはますます本を読まなくなっている傾向にあるそうなので私が教員になった際にはあの時先生が私に薦めてくれたように私もぜひ生徒にこの『フランダースの犬』を薦めてあげたいと思う。

# 『老人と海』

## —サンチャゴに教えられたこと—

寺田 藍

わたしの選ぶ一冊

『老人と海』 アーネスト・ヘミングウェイ 【アメリカ】

話は、キューバの老漁夫サンチャゴと少年マノーリンとのやり取りに始まる。サンチャゴは、長い不漁にもめげず、小舟に乗り、たった一人で出漁する。残りわずかな餌に想像を絶する巨大なカジキマグロがかかった。四日にわたる死闘の末に老人は勝ったが、帰途サメに襲われ、船にくくりつけてあった獲物はみるみる食いちぎられていく。人間の勇気と自然の厳粛さを謳った話である。

私はこの本を読んでいて、老人の自然と戦おうとする姿に何度も感動させられた。四日間集中を切らさず網を操作し、釣り上げた後も襲ってくるサメに勇敢に立ち向かう。きっと同じ状況に置かれても、私は老人のように忍耐し、勇気を奮うことはできないと思う。何日も巨大な魚に引っ張られ、遠いところへ連れて行かれるだけでも私は恐怖を感じるだろう。そして四日も耐えることなく網を切ってしまう、何も釣れずに帰る八十五日目になっていたように思う。仮に魚を釣りあげたとしても、サメなんかには襲われてしまうと、老人のように戦い抜くことができるかどうか怪しい。きっと私のことだから、パニックに陥って逃げているかもしれない。海を愛し、敬意を払っている彼だからこそ、海と戦い抜き港に戻ることができたのだと思ったのだ。

老人は海の上で何度も大きな声で、独り言を言っていた。港に帰り、少年と言葉を交わした時彼は幸せを感じていた。会話ができる幸せというのは、今の私の生活で感じられることはない。それは普段の生活の中では当たり前のことなのだから。だが、老人は教えてくれた。普段当たり前だと思っていることも、本当はすごく幸せなことだということ。人は、何かを失った時、ようやくその大切さに気付くという。まさにそうだった。今この社会には、あって当たり前だと思われていることが大量にある。そのすべてに通じることだと私は思う。今こうやって紙があり鉛筆で字を書くことができることも。電気があり、水があり、ガスがあり。私たちは、そんな当たり前で囲まれているからこそ、生きていくことができているのだ。老人の経験や、ちょっとした一言から考えさせられ、少なくともこの本を読んだ甲斐があったなあと思う。

## 『赤毛のアン』を読んで

田村香里

わたしの選ぶ一冊

『赤毛のアン』 L・M・モンゴメリー 【カナダ】

舞台は東海岸のプリンス・エドワード島州で、その島に60代のマシュー・カスバートと、50代のマリラ・カスバートという独身の兄と妹が暮らしていました。

子どものいない2人は、将来に備えて、男の子を引きとろうと考えたが手違いで、赤毛で、やせっぽちの11歳の女の子「アン」が来ます。女の子は農作業の役に立たないからと、追い返そうと考えますが、アンの明るい性格に2人はすっかり魅せられ、結局、引きとって育てることになります。

こうしてアンは、島の美しい自然の中で2人の愛情に恵まれ、すこやかに、育ち、優しくて魅力的な16歳の娘になります。

と同時に、2人もアンを育てることによって、生まれて初めて子どもを愛する喜びを知って温かな魅力をたたえた人物へと、変わっていきます。

### <感想>

この小説は、アンの成長をすこやかに描くだけでなく、マシューとマリラのように人生の半ばをすぎた大人が、勇気を持って新しい生き方を始めることで人間として成長し、新たな幸福を手にしていく姿を描いていると思います。

子どもの成長と大人の成熟、生きる喜び、苦難も悲しいこともある人生を力強く生き抜いていくすがすがしい姿が、感動的に描かれているからこそ、『アン』は、約100年にわたって、世界の人々に愛され、読みつがれているのだと私は思います。

私は、この作品を読んでマシューとマリラと同じく「アン」の人柄に惚れこんでしまいました。「アン」は小さいころ、明るくて、かわいくて、生き生きとした気立てのいい女の子でした。そして、成長していく中で、優しく賢く魅力的な娘になっていきました。私は、こんな「アン」みたいな人付き合いが上手い人になりたいと思いました。私は人見知り激しく、大学に入ってもいろいろと苦労することが多く、大変なことがたくさんありました。しかしこの本を読んで、人と接することの楽しさや、嬉しさを学びました。部活ではバスケットボールをしているのですが、その中でも積極的にプレーすることや、チーム内でのコミュニケーションにも生かすことが出来ました。また下宿生活で自立する大切さを学び、この作品を読んだことによりそのことを再確認することができました。これからの大学生活で大変なことや、問題もいろいろ出てくると思いますが、アンのようにこれからも明るく頑張りたいと思います！！

## シェイクスピアの世界

井 芹 威 晴

わたしの選ぶ一冊

『ハムレット』 ウィリアム・シェイクスピア (1564-1616) 【イギリス】

私が始めてこの作品を知ったのは、中学生のときです。初めは「おいしそうな題名だな」としか思いませんでした。その後高校生のとき、もう一度聞き興味を持ちました。

〈百千の心を持ったシェイクスピア〉と呼ばれるほどシェイクスピアは、多種多様な人物を描き出す作家・劇作家です。そのシェイクスピアの作品の中でも『ハムレット』は最も有名で、最も大規模な戯曲であり、シェイクスピア四大悲劇の一つに数えられています。

私はこの作品を読み、多くの命が奪われ、さらに自らの命をも犠牲にしてまで父の仇である国王を討つハムレットの姿に心を打たれました。今の世の中では、殺人はもちろん許される行為ではありませんが、自分が決めたことを何が何でも達成する精神は必要だと思います。

私は今後この『ハムレット』だけでなく、シェイクスピアの作品を読み、また劇や映画もみて、シェイクスピアの世界を楽しみたいです。

## 『ダレン・シャン』を読んで

神足直人

わたしの選ぶ一冊

『ダレン・シャン』 ダレン・シャン 【イギリス】

<あらすじ>

主人公はダレン・シャン。サッカーが得意な普通の男の子だ。ある日ダレンは、ひょんなことからクレプスリーというバンパイアに血を流し込まれ、半バンパイアになってしまう。ダレンは家族や友人、故郷を捨て、クレプスリーについていくことを決意。しかし、故郷との別れ際、隠していたダレンの正体を知った友人スティーブから絶対にダレンとクレプスリーを倒すと言われる。その後試練をくぐりぬけ、バンパイアの敵であるバンパニーズと対決し、バンパイア元帥となったダレンは、スティーブがバンパイア大王になっていたことを知る。川岸で1対1の対決をするダレンとスティーブの元にミスター・タイニーという運命を操る男が現れ、2人に全ての事実を話す。

「私の息子たちよ。」と。

<感想>

いったいどんなストーリーに展開するのだろうと思った。スティーブがクレプスリーを見て驚いた時には、クレプスリーの正体がドルトン先生なのかなと思ったので、バンパイアが出てきて、そんなアホな、と思った。ところが、ダレンシャンが蜘蛛を盗みにはいったところでは、もう物語の世界にどっぷりと浸かってしまっていて、いつダレンのもとにクレプスリーがやってくるかどきどきした。スティーブとダレンの友だち関係の微妙なすれ違いもよく描かれている。だからこそ、スティーブが蜘蛛に刺されたときのダレンのキモチがよくわかる。ああいう後悔のキモチは子どもならではのものだと思った。

ダレンや妹のアニーの子どもたちの非力さ、大人にちゃんと話さなくては、という気持ちの揺れが痛いほどよくわかった。大人の小説にはこういう子どもの、最終的には大人の力を借りないとどうしようもないという非力さと、そこまで追い込まれた時に問題を打破する力強さはないと思う。それが本当によく描かれている。だから、ダレンがスティーブを助けるために、バンパイアになるという筋は、スティーブを助けたいという純粋な友情だけではなくて、ダレンの責任のとり方だったり、親から幻滅されたくないとか、親に迷惑をかけたくないという子どもの世界の仁義をきったんだと思った。ただ、バンパイアとなってクレプスリーと旅をはじめるといって、ちゃんと人間として一度死ぬという芝居もよくできた話だなあと思った。最後に出てくるスティーブとの関係が今後の話の軸になりそうでこれもまた楽しみ。お葬式のシーンは思わず泣いてしまった。すごくおもしろい小説だった。

## 『デセプション・ポイント』の魅力

平 拓也

わたしの選ぶ一冊

『デセプション・ポイント』 ダン・ブラウン (1964-)

この本を読む前に、同著『天使と悪魔』『ダ・ヴィンチ・コード』を読んでいた私は、著者ダン・ブラウンのイメージを「ヨーロッパのキリスト教史がらみのミステリー作家」と勝手にイメージ付けていたし、実際同じようなイメージを持っている人が大多数を占めるだろう。しかし、この本はそれとは全く異なり、現代の米国の大統領選とNASAというものを題材にしている。

あらすじは、NRO(国家偵察局)職員のレイチェル・セクストンは、ある朝父親であるセジウィックと朝食を共にする。セジウィックは現在行なわれている大統領選挙の候補であり、近頃経費の増加が激しいNASAを批判し、教育優先を掲げる政策を提唱して日の出の勢いを得ている人物だった。いまや大統領選の争点が、これまでさんざん失敗をくりかえし何十億ドルもの資金をムダ遣いしてきたNASAの処遇に絞られ、宇宙開発の民営化が抜本的に検討されるようになるのも、時間の問題なのである。そんな父親は彼女に自分の下で働けという。父を好かず、現在の仕事に誇りをもっている彼女はこれを断るが、その日彼女は父親の敵対候補でもある、現職のザック・ハーニー大統領からの極秘任務を言い渡される。対立候補の娘である自分に何の用事があるのか皆目見当もつかないレイチェル。NASAがとある重大発見をしたのでこれを確認してほしいと言うのだ。彼女はこれを確かめるべく北極へ出発する。

その発見とは、北氷洋の下にあった隕石であった。しかもただの隕石ではなく、その隕石には、なんと生物の痕跡が残されていたのだ。つまり「地球外生命体」の存在を裏付けるものが史上初めて発見されたということだ。これが発表されれば、NASAへの国民の期待は、あのアポロ計画の時のように盛り上がるにちがいない。それは、来る大統領選挙でも大きな意味を持つはず。世界を揺るがすその発見を公表するにあたって、大統領に集められたのは、テレビで有名な海洋学者のマイケル・トーランド、宇宙物理学者のコーキー・マーリントン、そして情報分析の専門家であるレイチェルだった。

レイチェル達が事件の核心へ迫れば迫るほど、命を狙う魔の手が忍び寄る。しかも、父であるセクストン上院議員ときたら、娘の命と引き換えにしても、大統領の椅子を狙ってやまない。はたして欺瞞という欺瞞が次々と暴かれ、大統領選は思いもよらぬ展開を見せる…。

『天使と悪魔』や『ダ・ヴィンチ・コード』におけるキリスト教のように、大統領選やNASAに関するタブーを破っていくといった内容とそれに絡む人々の思惑が巧みに文章化されている。物語の展開は早いのだが、その展開の途中にもしっかりと伏線を張っていたり、著者の得意な、多数の異なる視点で話を進めていき最後に一つに繋がるといった手法が見事に決まっていて、上下巻、800ページに及ぶ長編が長いと感じられなかった。加えて、こちらはデルタ・フォース(妨害工作をする者達)の登場シーンや氷上での格闘シーン等、上記二冊よりも映像にすると映えそうな場面が多く、強く映画化を希望する小説である。



## 『窓際のトットちゃん』を読んで

酒井 悠花

わたしの選ぶ一冊

『窓際のトットちゃん』 黒柳徹子 【日本】

女優、司会者であり、ユニセフの親善大使も務める黒柳徹子さんが、1981年に書いた自伝エッセイです。黒柳徹子さんは、小さい頃は少し変わった女の子だったそうです。大人から見ると不思議な行動をしては困らせたり、戸惑わせていました。ある日ついに重なる奇行から小学校を退学させられて、自由が丘にあった「トモエ学園」に転校します。学園での生活を描いたノンフィクションの感動小説です。

<あらすじ>

「トットちゃん」とは黒柳徹子のあだ名。彼女は最初に入学した小学校で問題児扱いされていた。教室の机のふたが珍しくて授業中何度もパタパタ開け閉めしたり、パタパタやらないと思ったら窓ぎわでチンドン屋さんを待っていたり、日本の国旗を画用紙に描く授業では軍艦旗(旭日旗。朝日新聞のマークに似ている)に黄色い房をクレヨンで描いて机に跡が残ってしまったたり、本人は好奇心旺盛なのだが先生からは迷惑がられてしまい、とうとう小学1年にして退学させられてしまう。しかし、ユニークな教育方針の「トモエ学園」に転校し、のびのびと小学生を送るようになった。特に、校長先生の「君は、本当は、いい子なんだよ」という言葉は、これまで薄々と疎外感を感じていた彼女をいつも元気づけてくれる言葉であった。

ところが、そのユニークな校風のトモエ学園にも、戦争という暗い陰が迫ってきていた。親切だった小使いさんを含め、トットちゃんの周りの大人たちがどんどん戦地に行ってしまうたり、傷病兵の慰問、疎開、最後にはトモエの校舎もB29の空襲で焼けてしまう。

この本が出た時、ちょうど日本では校内暴力の嵐であり、ある学校では卒業式で警官が警備したという。いわゆる「タレント本」は一時の流行りですぐ売れなくなるというのが普通だが、この本に限っては、そのような時勢にあって教育問題を考えさせるような本だったためか、ベストセラーとなり、小学校の教科書にも採用され、今でも老若男女に愛読されている本である。

<感想>

同級生のエピソードと、校長先生の教育哲学、トットちゃんの家話の話、涙と笑いに彩られた素晴らしい学園生活に胸を打たれました。その中でもやはりとても印象に残ったのは、トモエ学園の校長先生がトットちゃんに「きみは、ほんとうは、いい子なんだよ！」と言うセリフです。教育とは何か、教育者はどうあるべきか、子供はどう育つと素晴らしい人生が送れるか、色々と考えさせられる小説でした。私も将来、教師を目指していますが、子供達が自分を形成していくにあたって重要な時期に関わる仕事だという事を再認識することができました。また、子供と関わるにあたって子供の個性というものを教師側がしっかりと理解することができれば、それを学校という場で、十二分に伸ばすことができるのではないかと考えました。私自身、学生生活を過ごす時やバレーボールをする中で、友達の個性を見つけるとは、互いに認め合い、高め合ったり、お互いぶつかったりしたりしてきました。そういう事を学生の間に経験しておくことは、これからの将来に向けてとても大切で貴重な事ではないかと思えます。これからの大学生活では、そういった経験ができるように日々頑張っているかと思いました。

## 読書を通して

山口真那

わたしの選ぶ一冊

『アムリタ』 吉本ばなな 【日本】

私は読書が苦手であり本を読まないし、読んでもすぐに途中で断念してしまうことが多いです。高校生のときも毎年担任の先生に読書を勧められていましたが、ほとんど読書しないまま大学生になってしまいました。でも今年の夏休みこそは読書しようと思って本屋で適当に『アムリタ』を選んで買いました。この本を読み始めると、上下2冊をすぐに読み終え、珍しく読書に集中することができました。『アムリタ』は主人公が気ままに送る生活を表現したゆったりした感じの物語で読書が苦手な私でも物語に溶け込むことができ、みなさんにも是非読んでほしいと思ったのでこの本を選びました。

あらすじは、事故で記憶が曖昧になり自分でない自分と戦い続けている主人公の朔美が父や妹の死、弟の旅立ちという孤独の中でいろいろな人との出会いを通して新しい自分を確認しながら自分の居場所を探していくというものです。私はこの本を読みながら、さまざまなことを思い巡らせました。一つ目は、もし自分の記憶がなくなったらどうなるだろうということです。朔美は、自分の意思をしっかりと持った芯の強い人なので、周りの人に支えながらも自分自身の力で壁を乗り越えようとしていました。でも、きっと私だったら怖くて逃げ出すか、周りの人に依存して自分を見失ってしまうだろうと思います。改めて、自分の意思の弱さを痛感しました。二つ目は、この本を読むまで、出会いは入学式や結婚式などのような喜びに溢れた暖かくて良いもの、逆に別れは卒業式やお葬式のような冷たくて悲しいものというイメージを持っていました。しかし、この物語の別れは違いました。どこか暖かく綺麗なものでした。別れにも意味があることがすごくよくわかりました。別れがあるからこそその人のことを懐かしみ、その人の存在のありがたみを実感することができるのだなと思いました。

このように、私は読書を通してたくさんの発見をし、考え、学びました。読書はいろんな意味で人を豊かにしてくれるものだと思います。これをきっかけに、読書する習慣をつけたいです。

## 『あらしのよるに』友情を知ったわたし

北 浦 優 衣

わたしの選ぶ一冊

『あらしのよるに』 木村裕一 【日本】

この作品は、私の小学校4年生のときの教科書に掲載されていて、オオカミとヤギという喰う喰われる関係の2匹が偶然、あらしのよるに山小屋で一夜を共に過ごし、その中で徐々に友情が芽生えていくという物語です。住んでいる環境も立場も全く違う2匹が、たった一晩でこんなにも打ち解けて仲良くなっていくその様子は、現代の携帯電話などの電子機器によって、実際会話をしないで簡単に連絡を取り合っている子どもたちに見せてあげたい作品です。

「本当の友情とは何なのか？」をととても考えさせられました。友情というのは、見た目やその人の出身、年齢、性別といったこと抜きに生まれるもので、その結びつきはとても深いということを教えてくださいました。また、この物語はオオカミとヤギという全くの正反対の関係を描いているのですが、この関係は様々な場合に置き換えて考えることもできます。たとえば、男女の関係や、紛争を続ける民族同士の関係など、このようにいろんな見方ができることも魅力の一つだと思います。

また、私の小学校ではこの作品を使って、いくつかのグループに分かれ、それぞれの場面ごと互いに劇にして発表するということをしました。その中で、紙芝居をするグループや人形劇にして発表するグループが多かったのですが、私のグループは実際、自分たちがオオカミとヤギの役になって演じる方法で発表しました。実際に自分たちが演じるという方法で発表したグループは私たちだけでクラスみんなに大きな印象を与えることができました。

そういうこともあり、私の中でとても思い出深い作品になっています。

## 『ふたり』を読んで姉妹の絆を知った私

山下 紗代

わたしの選ぶ一冊

『ふたり』 赤川次郎 (1948-) 【日本】

わたしには姉がひとりいる。この物語を読んだのは中学生のころだった。この物語のお話は、一組の姉妹を軸に展開している。

ある日突然、姉が事故で亡くなった。その日を境に家族の絆が徐々に崩壊していく。そして妹がある男に襲われかかった時、頭の中でいないはずの姉の声が聞こえた。その声のおかげで一命を取り留めた妹の頭の中には、それ以来姉が住み続けた。色々な局面で姉の声に助けられつつ、数年が経った。しかし、妹が姉の年齢を越してしまったある日、妹の頭の中から姉は去って行った。

家族、友人、恋人、関係は違ってもそれぞれ皆が私を支えてくれている、そう思える物語だった。このお話を読んだ時、現実味は無いがどこの家庭でも起こることではないかと思った。物語のなかの妹と年齢が近かったこともあり、突然姉がいなくなったら私はどうなるのだろうか変なことを考えたものだ。家の事情も知っていて常に支えてくれていた友人、姉の死をきっかけに心配性になった母、浮気をする父。今になって考えられることだが、人間との付き合いは難しいが一度強い絆ができたならそれは切っても切れないものになるのではないかと思う。無論、家族というものは生まれた瞬間からのつながりであるわけで、それは一番の味方であると思う。また、親子よりも姉妹、兄弟のほうがより一層強いなにかで結ばれているような気がする。しかし小中学生のころは、ひとりっ子に憧れたものだ。自分のひとり部屋が欲しかったり、お下がりを使うのが嫌だった。大学生になったいまでは、服を共有することができることや、一緒に買い物に行ったり遊びに行けること、また一緒に登校出来ることを嬉しく思う。

姉がいて良かったと心から思える。きょうだいの存在を改めて実感できる、そんな小説である。

## 『明日の記憶』の記憶

西川理紗

わたしの選ぶ一冊

『明日の記憶』 萩原 浩 【日本】

皆さんには、忘れたくない思い出がいくつありますか？

幼い頃の可愛い思い出、家族との楽しい思い出、学生時代の青春の思い出…

いくつあるかと聞かれても数えきれない程、たくさんの思い出が誰にでもあるはずです。昔を思い出す度に、それが良い思い出であっても悲しい思い出であっても、「あのことがあったから今の自分がある」と、自分自身の成長を感じる事が出来るでしょう。

もしも、今までの大切な記憶や思い出がだんだん失われていく、そんなことが起こったら、どうしますか？

この本では、若年性の認知症にかかった男性が、ゆっくりと確実に記憶を失っていく様子が描かれています。職も失い、周囲からの目も変わり、苦しく悲しい現実があることが痛いほど感じとれます。

それまでの人生や今の自分を築き上げてきた出来事が、自分の中から消えていく、という恐さの中で、男性の妻の想いを通して、何が信じられるのか・人生とは何なのか、など多くのことを考えさせられました。

この「明日の記憶」は、次の日からの自分の生き方を変えようと思わせてくれる、お勧めしたい素敵な一冊です。ぜひ皆さんも読んでみてください。

## お気に入りの『バッテリー』

松永夏実

わたしの選ぶ一冊

『バッテリー』 あさのあつこ 児童文学小説 【日本】

### ○あらすじ○

巧の中学入学を前に、祖父のいる岡山県新田市に引っ越してきた原田一家。巧はランニング中に道に迷いかけて豪と出会い、後日バッテリーを組むことになる。ピッチャーとして絶対の自信を持ち、誰に対しても強烈な我を通そうとする巧と、その才能に戸惑いながら強く惹かれていく豪。運命に導かれたかのように、最高のバッテリーとしての2人の人生が始まっていく…。新田東中学校に入った巧らだったが、そこに待ち受けていたのは、巧の圧倒的才能とその実力を認めるが、巧と衝突する戸村監督。それをつまらなく思う展西先輩に巧は陰湿なイジメを受け、その事件の関係で部活動も停止になってしまい…。

部活動停止になったままで引退を迎える三年生のために、戸村監督が強豪・横手と練習試合をしたいと希望する。新田東中の校長は、とても相手にならないと却下したが、どうしても試合をしたいキャプテン海音寺が、横手の天才スラッガー・門脇と知り合いなのをツテに、巧の球で門脇を圧倒すれば、試合が出来るはずだと提案する。見事、門脇を唸らせた巧だったが、豪は、その巧の球を捕球しきれない。強豪校・横手二中との練習試合で打ちのめされた巧たち新田東中は敗れた。豪もキャッチャーとして球を捕り切れなかったと責任を感じて、部活でも巧を避け続けてしまう。一方、海音寺は横手二中の五番打者で門脇と幼馴染みの瑞垣俊二と没収試合となってしまった練習試合をもう一度やり直す計画を立てる。そして監督の戸村は、巧のキャッチャーを吉貞にさせると言い出す…。

### ○感想○

今までたくさんのに出会ってきた。面白いものもそうでないものも、ドキドキするものも泣けるものも、とにかくいろいろなものがあつた。そんな中で時々「これは？」という特別なDVDに出会うことがある。

それがこの「バッテリー」である。それまでもテレビなどで取り上げられているのを見ていたが、見たことのない作家だったため、あまり関心はなかった。お勧めされたので、じゃあ見てみようとして最初は気軽な気持ちだったと思う。まず最初を見て、それから続きを無我夢中で見た。夢中になった。「こんな面白いをDVD今まで見てなかったなんて!？」と猛烈に反省した。角川文庫版の解説者北上次郎先生と全く同じことを思ったのである。

『バッテリー』には魅力的な登場人物がたくさん登場する。どの少年も、「何が好きで何が嫌いで勉強は数学が得意なんだろうな、学校では意外にモテるんだろうな、家に帰ったらこんな風に過ごしているんだろうな」と、そんな風にいろいろと想像力を働かせることができるくらい、生き生きと血が通った人物として描かれている。

そんな少年たちの中心にいるのは、間違いなく「原田巧」である。天才ピッチャーで自分に絶対の自信があつて、プライドがとても高く、他人のことなんかちっとも気にしない。正直言ってこんな人が自分の周りに居たら閉口するし、あまり仲良くできないかもしれない。自分が中学生だったらどうだろう…きっと怖くて近寄れない。だから巧が好きかと問われ

ば「う～ん、あまり好きになれないかも」と答えるだろう。

それにも関わらず私は巧が気になって仕方がないのである。他人をあれほど巻きこめるパワーを持った彼に惹きつけられている。巧に出会わなければ、多分豪はあれほど悩むことなくもっと穏やかな中学生を送れただろうし、瑞垣も門脇に対するコンプレックスを隠したままさらけ出すこともなかっただろうし、展西や縁川もあんな終わり方はしなかっただろう。

勿論それが悪いと言っているわけではなく、たった一人の人間があれほどの人々を変化させていることが私にとって驚きであり魅力なのである。

本を読み進めるにつれ、そんな巧にも多少の変化が表わされている。他人に対する関心があれほど薄かったが、バッテリーの片割れ永倉豪に対して、「何を考えている、豪？」と、豪のことが分からない、知りたいと思うのだった。

豪の存在に対して必要だと言っていると私は思ったのだが、しかし言葉が出ない。豪からは、「キャッチャーなんかだと？ふざけんな、絶対誰にもお前の球は渡せねえ」と返される始末だった。ああ、巧、なんて不器用なんだろう。最初では、もっといわゆる理想的なバッテリーとしての関係を思い描いていただけにこういう風な展開になるとは全く思っていなかった。特に豪がここまで思い悩むとは…もっと屈託のない素直で誠実な性格だと思っていたので意外だった。

## 『バッテリー』を読んで

中西由実子

わたしの選ぶ一冊

『バッテリー』 あさのあつこ 【日本】

原田巧は、中学入学を控えた春休み、岡山県に家族で引っ越してくる。巧は、ピッチャーとしての才能に絶大な自信を持ち、同時に他人を寄せ付けぬ孤独な面を持っている。家族には病弱な弟・青波、青波をいたわるあまり巧に冷たくあたってしまう母・真紀子。野球にあまり関心のない父・広、そして甲子園出場校の有名監督だった祖父・洋三。温かい家族でさえ、巧の孤独な面に対する接し方に迷う時があった。

巧はそこで、同級生・永倉豪と出会う。その投球に惚れた豪は、バッテリーを組むことを熱望。二人は、新田東中学野球部に入部する。しかし、待ち受けていたのは、監督の支配下のもと“徹底した管理野球”だった。自分を貫くため、監督に歯向かい衝突していく巧。そんな巧のまっすぐさに同級生・矢島繭は惹かれていく。

順調に見えた巧と豪。しかし、やがて二人の技術の格差が表面化、バッテリー解消を口にする豪。それを受け入れた巧に弟・青波は納得しなかった。必死に仲を取り持つ青波。

「投げろや！」再びバッテリーとなった二人だったが、折りしもその時、青波が病気で倒れる。弟を巻き込んだことが原因だと母・真紀子は、巧を突き出す。が、父・広は、体の弱い弟を思い、親にかまわれない寂しさを紛らわすためにも、野球を必死に続けてきたのでは？と語る。青波は命の危機にさらされながら、行われる強豪中学との試合直前、巧にお願いする。

「勝ってな…お兄ちゃん」

青波の言葉を胸に、巧はグラウンドへと向かった…。

初めは、巧はすごく素直じゃなくて、印象が悪かった。でも、野球に対する姿勢はすごいなと思いました。巧のお母さんは、もっと巧を応援してあげたらいいのにとあって、弟・青波はすごくかわいいなと思いました。巧は、弟や、友達想いで、すごくいい人だと思ったけど、不器用で、自分の気持ちを素直に伝えられないところが、すごく読んでいて、モヤモヤしました。強豪校との試合のときに、バッテリーが解散になって、どうなるのかなと思ったけど、また、一緒にバッテリーを組んで、試合をしたのは、すごく感動しました。最後は巧がすごくかっこよかったと思いました。



## 『バッテリー』を読んで

西保直紀

わたしの選ぶ一冊

『バッテリー』 あさのあつこ 【日本】

「あらすじ」

自分を信じて直球を投げ続ける少年巧が、自分を受け止めるパートナーのキャッチャーである豪を得て、少しずつ仲間を信頼し変化していく様子を細やかに描いている。

「感想」

心も体も子供から大人に変化する不安定な時期。誰もが一度は経験するような苦しみ。思わず巧に自分を重ねてしまいました。孤独と付き合い、力強く生きようとする巧のリアルな姿に惹かれました。「ただキャッチボールをするだけで心が通じ合える」そんな野球の魅力が十二分に伝わってきました。それと同時に巧や豪などのように大好きなことに必死で打ち込めるということが素晴らしいと思いました。今しかできないことは今やっておく大切さも知ることができました。仲間と正面から向き合い、次第に心を開いていく巧の姿を観ながら、人と関わること、心を開くことの大切さを改めて感じました。野球一筋の二人だけ対照的な巧と豪。最高のバッテリーだけ衝突もする。本気で向き合える人がいるってことはすごいことだと思います。私もスポーツも友達にも全力投球で頑張りたいと思いました。私もこんな気が合う無敵そのものの巧や豪に負けにくいぐらいのバッテリーをつくりあげていきたいと目標を持つことができました。野球、いやスポーツにしても勉強にしてもさせてもらうんじゃなくて自らするものだと思います。「野球とは気持ちを伝えるスポーツ」という言葉が印象に残っています。巧の友人の「お前、なんのためにやっとなんじゃ。お前にとっての野球って、何なんじゃ」というセリフがものすごく心に響きました。巧の孤独の野球、弟のやりたくてもできない野球。野球って何なんだろう。改めて考えさせられました。野球が大好きな人も野球をあまり知らない人も、これを観ると、自分の心の中に必ず何かが生まれると思います。私は高校時代を思い出しました。友達、家族、学校、自分自身の在り方。私にとってそんな想いが詰まった物語でした。いくつになっても、ひた向きに頑張れる何かを見つけられればと思います。「人とのつながり」の大切さやキャッチャーの重要性を再確認しました。それはキャッチャーに限らず人を受け止めることの大変さと大切さを感じたからです。私も自分を信じて、自分の意志を貫き通せる何かをこれから見つけていきたいと思いました。

## 有名文学を通して学べること

戒丸屋勇揮

わたしの選ぶ一冊

『吾輩は猫である』 夏目漱石 (1867-1916) 【日本】

私は小さいころからこの夏目漱石の『吾輩は猫である』を読んできたかった。それは、文学史などはあまり興味がなかったが、この本だけはよく耳にしていた。テレビのクイズ番組や学校の教科書などいろんなところで聞いていた。だから相当有名なものでほとんどの人が知っていた。だから、こんなに知られているなら自分も内容がわかる年になったら読んで知らなければならぬと思っていた。千円札の肖像になってる人が書いてるところも惹かれた理由の一つだ。

この物語の大きな特徴は、「吾輩は猫である、名前はまだ無い。」というフレーズだ。これだけ聞くと意味はあまりわからないが、イメージはわいた。おそらく、主人公と猫を中心に繰り広げられるストーリーで、主人公が猫の何かに惹かれて、猫に生き方を学び、私は猫のように生きていこうと主人公がそう感じさせられるストーリーなのかなと思っている。まあ読めばわかるので時間を見つけて早く読んでみたいと思う。昔猫を飼っていたので、そういったものに興味があったのかもしれない。

あとこれを通していろいろな文学史を読んでいき知っていけたらいいと思う。

## 本屋で見つけた漫画の『人間失格』から

上田井英和

わたしの選ぶ一冊

『人間失格』 太宰 治 (1909—1948) 【日本】

小学生の頃、中学生の頃、私は国語の便覧を見るのが好きで、よく国語の授業中に便覧を見ていた。日本書紀などの神話系が載っているページや百人一首のページなど、そして文学作品と作者についてのページをその中でもよく見ていた。そこに載っていた「人間失格」。太宰治の作品は「走れメロス」を授業で習っていたので、この時はこの作品も太宰治の作品なのだけだと思っただけだった。

現在、私は『人間失格』を読まないまま大学生になった。そんななか便覧のことなどすっかり忘れた私はこの間、古本屋に行った時に「人間失格」という題名の漫画を見つけた。どこかで聞いたことあるなと思い、手にとってみたら原作者の所に太宰治と書かれていた。その時、自分は昔、便覧を見るのが好きでよく見ていたなと思いだし、「人間失格」の事も思い出した。ちょうどその日は予定も特に入ってなかったので、ちょっと読んでみようと思い立ち読みしたのだが普通におもしろかった。原作を知らないので少し現代風に脚色していたのかもしれないが逆に現実味があって読みやすかった。その店には一巻しかなかったので全部は読めなかったのだが続きを読みたくなり、また原作も読みたくなった。今度時間がある時にでも本屋で探してみようと思う。

もともと本を読むのは好きなのでこれを機に文学作品を読んでみるのも良いかなと思った。

## ふゆのよるのおくりもの

坂部 涼

わたしの選ぶ一冊

- 1.『夜は短し歩けよ乙女』 森見登美彦 【日本】
- 2.『ふゆのよるのおくりもの』 芭蕉みどり 【日本】

1. この作品を選んだ理由は、この作品を読んだ友達から薦められたからである。
2. この作品は、私が幼稚園ぐらいの頃に、祖母が買ってくれた絵本である。  
ねずみの家族が、クリスマス前にもみの木に飾りつけをし、クッキーやケーキなどのおかしを作る。翌日、家族はおばあちゃんとおじいちゃんの家に行くことに。しかし、双子のティモシーとサラは、家に誰もいないとサンタさんが来てくれない事を心配する、という話である。  
この絵本は、挿絵が細かく、カラフルに描かれていた。挿絵の一つ一つを見入ってしまうほど工夫されていて、私は、この挿絵が大好きであった。  
内容も、クリスマス前のわくわくする気持ちなどが表れている。  
小さい頃に持っていた絵本やおもちゃなど現在はほとんど残っていないのだが、この絵本だけは、10年以上たった今も持っている。それぐらい、私にとって大切に、お気に入りの絵本である。

## 源氏物語へのあこがれ

岩 寄 未 紗

わたしの選ぶ一冊

『源氏物語』 紫式部 【日本】

舞台は平安時代、桐壺更衣と桐壺帝から生まれた光源氏が主人公の物語です。彼は正式に後継者として迎えられてはいませんが、帝の寵愛を受け、また桐壺更衣も帝から一番愛されていたという、出生から心ときめく内容です。

私が源氏物語に出会ったのは高校での授業です。私のみならず、みなさんが高校生で出会ったものと思われます。古典として取り扱われるのですが、私はこの作品を通して文法的な勉強意欲をそそられるようになりました。あんなにも現代語訳をしたくなかったことが今までなかったからです。そのうちに古典としてではなく、現代語された物語を読み切りたいたというのが私の夢になっていました。

彼の生涯は何不自由ないものはずなのに、愛という形の知れないものに翻弄され、波乱に満ちていた。情に深く、女を悲しませないように、皆のことを心の底から愛していました。女がそれで悲しまないわけはありませんが、彼なりの誠実を読みとれ、物語の中の彼にあこがれを感じてしまいます。父の影響があるのか、愛することに限度を作らなかった所がすごく素敵だと思います。

作者は紫式部だと言われていますが、女が一人で書ける内容ではないという視点から多種の考えがあります。でも私、女から見るとこの話は女の人が書いたとしか思えません。手助けを受けながら、彼女は理想の物語を長い間書き続けたのだらうと思います。

物語ではなく、日記ではないかと思いたくなるような作品です。私が勝手に平安時代の理想化をしているだけでしょうか、こんな生き方をした人が本当にいただろうなあと思うのです。文字を読んでいるときに、目の前で世界が広がります。頭の中で、なんてものではありません。目を閉じれば、自分ができる想像、創造のなかで、一番綺麗なものが見えるのです。無意識のうちになのです。非現実的な世界だから余計に想像力が広がります。

誰かを愛することに臆病にならずに、自分の想いをつらぬくことを教えてもらえた気がします。通学の電車で読み切ることを目標に、大事な気持ちを学んでいきたいと思います。

## 『夜のピクニック』

松本 蘭

わたしの選ぶ一冊

『夜のピクニック』 恩田 陸 (1964-) 【日本】

夜行登山が私の高校では毎年恒例の冬の行事だ。希望する2年生が主体となって行われる。この行事は私が楽しみにしていた行事の1つであった。1年のときは部活で参加できなかったこともあり、2年時の期待度は半端なく高かった。今でも夜通し歩きながらもテンションが高かったことやみんなの死にかけた様子を鮮明に覚えている。大学に入り、行き帰りの電車で暇だったので、姉の持っていた『夜のピクニック』をなんとなく読み始めた。この本のテーマはズバリ高校の夜行登山であり、内容を把握せず読み始めたため、思いがけないところで夜行登山を思い出すこととなった。

天気は晴天。同じだ。ただ季節は秋だった。ヒロインの貴子は3年間誰にも言えなかった秘密を精算するため、この行事で密かに胸の中で賭けをしていた。私の場合本みたいに何かあるわけでもなかったが、夜通しみんなで歩く楽しさをひたすら嘯みしめていた。歩き始めてすぐは、みんないつもと同じような会話だった。しかし、日も落ち始め歩き進めていくにつれ、なぜか不思議と今まで友達に聞いたかったことや普段より一歩踏み込んだ話になっていく。夜更かししながら一緒に歩き続けるという雰囲気がそうさせるのかわからないが、腹を割って話せるような気になってくる。貴子の秘密も友達と語り合いながら明らかになっていく展開に、雰囲気がそうさせているのかなと自分の経験を重ねながら読んでいた。そろそろみんなの顔に疲れが見え始めたところに小学校での休憩。エネルギーを取り入れるために持ってきたお菓子を口々に入れ、チョコレートの旨さを改めて実感した。食べているのが夜ってことは気にしない。また歩き始めて次の休憩場所の小学校へ向かう。だんだん次の休憩を求めるようになってくる。次は写真を撮って、豚汁の配給があったのだが、これも同じだ。たぶん私が経験していなかったら特に気にも留めず流しているだろうこの豚汁は、普通の豚汁の何十倍もおいしかった。こうして苦勞して着いた頂上にいる時間は短くあっけなかったのを覚えている。帰りの一行の様子とはとにかく顔が死んでいた。私はというと2年間ずっと楽しみにしていたことが原因であまり疲れることはなく、同じく元気に隣を歩いていた友達と興奮していた。そのため、この夜行登山の名物の睡眠歩行をすることができなかったことが唯一の心残りだ。そんなこんなで夜行登山は長いようで短かった。

内容についてはあまりふれていないが、先が気になって次々読めてしまうような展開で、もちろんおもしろかった。それ以上に『夜のピクニック』は自分ももう一度夜行登山をしているような気分が味わえる本だった。この本は私の大切な思い出の記録となった。

## 『坊っちゃん』を読もうとした小学生のわたし

國府志麻

わたしの選ぶ一冊

『こゝろ』 夏目漱石 (1867-1916) 【日本】

わたしが初めて夏目漱石の作品を読んだのは、おそらく小学五年生頃のことだ。小学生時代のわたしは活発で、休み時間になるたびにグラウンドに出てドッジボールやサッカーや鬼ごっこばかりをしていた。しかし小学校高学年になり、本を読むことも必要だと思った。マンガのような本ではなく、ちゃんとした文学作品を読まなければならないと思った。そこで選んだのが夏目漱石の『坊っちゃん』だった。いくら本に疎くても夏目漱石ぐらいは知っていたし、夏目漱石の作品を読んでいることがかっこよく思えた。

しかしそれを読むことは、当時のわたしにとっては難しいものだった。言葉づかいが古く、読むのにもものすごく時間がかかった覚えがある。内容がきちんと理解できず、途中で飽きてきて適当に読んだので、今でもどんな話だったのかほとんど知らない。覚えているのは登場人物の名前がユニークだったことと、生徒のいたずらで、主人公の布団の中にバツタだったかイナゴだったかが入れられていたことぐらいだ。

次にわたしが夏目漱石の作品に興味を示したのは高校三年生になってからだった。国語の授業で『こゝろ』を扱ったのだ。その授業では、話の後半のKが自殺する場面あたりを取り上げた。班に分かれて登場人物の先生やKの心情がどういうものだったかを議論したり、もし自分が先生やKの立場だったら・・・など議論し合った。そうするうちにこの作品の深さを感じ取るようになった。先生はとても綺麗な人間であるとは言い難く、しかしそこがとても人間らしいと思った。

残念ながらわたしはこの作品の全部を読んだわけではなく、教科書に取り上げられていた一部分しか読んだことはない。結末も知らない。一度は全部を読みたいと思いつつ、結局読まず仕舞いになってしまった。

大学生になった今ならもっと楽に『坊っちゃん』を読めるとははずだ。『坊っちゃん』や『こゝろ』を、今読んでみてどのように感じるのだろうか。前と違う感想を持ったら、それは自分の成長なのだと思う。

# 『こころ』 :友情と愛に生き、死んだ男の物語

塩谷有規

わたしの選ぶ一冊  
『こころ』 夏目漱石 (1867-1916) 【日本】

私が以前に読んでみて、印象に残っている文学作品は、夏目漱石の「こころ」である。この作品を読むきっかけとなったのは、参考書に載っていた現代文のところで、問題文となっていたためである。もちろん、問題文として載っていたため、全文は載っておらず、いまだに全てを読むことはできていない。以前読んで感動したというよりは、改めてもう一度読んでみたい作品というのが正しいのかもしれない。

物語のおおまかな内容は、先生と呼ばれる男が下宿している。その下宿先には、お嬢さんと呼ばれている娘さんがおり、先生は彼女に恋心を抱く。その後、先生の友人であるKという男も同居し始める。難しい性格であったKだったが、お嬢さんや、その母親との交流の中で次第に丸くなっていき、お嬢さんとも親密になっていく。それを見て、危機感を覚えた先生は、母親に相談し、お嬢さんとの婚約を認めてもらう。しかしその一週間後、Kは自殺してしまい、この世を去る。罪悪感に襲われた先生もまた、自ら命を絶つというものである。

私がこの作品を選んだ理由は、省略されてしまった部分が気になったというのもあるが、一番の理由は先生の生きざまである。友人に好きな人をとられるのではという焦りから、少し後味の悪い方法でお嬢さんとの婚約にいたるが、最後は大切な友人を失ってしまい、命を絶つということで、せつなく勝ち取った愛よりも友情を取ったという生きざまが、非常に印象に残っている。

もう一度読んでみたいが、ドラマや映画などで、現代風にアレンジされた「こころ」を見てみたいものである。



## 『こころ』を読んで

四斗辺幸大

わたしの選ぶ一冊

『こころ』 夏目漱石 (1867-1916) 【日本】

<あらすじ>

「私」が「先生」に出会ったのは大学生の時だった。その超然とした様にひかれ、「私」は「先生」宅へ足繁く通うようになる。世間の目をのがれるようにひっそりと学問をして美しい妻と暮らす「先生」には、人には言えない暗い過去があった。「先生」はその過去については妻にも隠していたのだが、「私」との交際が深まるにつれ、その過去をうちあけられる相手であると認められるようになった。父親が死期を迎えたために「私」が故郷に帰省している間、「先生」から分厚い封書がとどく。秘密にしてきた過去がしるされてあった。「先生」がまだ学生だった頃、Kという親しい友人がいた。そのKの恋する相手が、自分が思いの寄せる下宿先のお嬢さんであるということを知り「先生」は動揺する。「先生」は自分の気持ちをKには伝えず、彼を出し抜くような形で、お嬢さんの親に結婚をしたい旨を申し出る。結婚は許可され、Kはその事後報告だけが伝えられる。激しい後悔にさいなまれた「先生」はKに詫びをしようとするが、Kは自殺をする。そして「私」にこのことを告白した「先生」も自らその命を絶ってしまう。

<感想>

伏線がたくさん張ってあって、すごく面白いなと感じました。正直、奥が深すぎる作品だと思います。それと先生の生真面目で不器用な感じが好きです。ただたまに真面目すぎていらっときますけど。また、1つだけこの小説の中に「向上心のないやつは馬鹿だ。」と数回出てきます。本当にその通りだと思います。僕も大学生活の中で授業や、部活において、向上心をもって臨みたいです。

## 題名に惹かれた『機関車先生』

山 神 玄

わたしの選ぶ一冊

『機関車先生』 伊集院静 【日本】

あらすじ

瀬戸内海に浮かぶ小島、葉名島に向かって一隻の連絡船が進んでいく。船には島を見つめている一人の青年、吉岡誠吾が乗っていた。一方、島で唯一の小学校、水見色小学校では校長の佐古周一郎が吉岡の到着を待ちわびていた。周一郎には、どうしても吉岡に来てもらいたい理由があったのだ。臨時教師がやって来る、そんな噂を耳にしていた子供たちの胸も期待と不安で大きく膨らんでいた。やがて周一郎と共に姿を現したのは大きな体に、優しい眼差しの先生だった。その口から最初の言葉を固唾を呑んで待つ子供たちに、吉岡は深々と頭を下げ、おもむろに黒板にむかって文字を書き出した。"ぼくは話すことができません。でも、みなさんと一緒にしっかり勉強します。どうぞよろしく"。あまりの驚きにあ然とする子供たち。しかしすぐに生徒の1人が「口をきかんの？でも先生は大きくて強そうだから、機関車先生や!」と教室の後ろにある機関車の写真を指す。途端に残りの生徒たちも大喜びして、一齐に先生に拍手を送る。こうして機関車先生と子供たちとの島での生活がはじまった。先生のオルガンに合わせて「月光仮面」を歌ったり、浜辺にスケッチに出かけたり、子供たちの楽しい日々は永遠に続くかに思えた。先生と子供たちは日を重ねるごとに深く、強い絆を結んでいった。しかし暗い雲から滝のような豪雨が降ったある日、大波と共に悲しい事件が突如として島を襲う。子供たちのリーダー格だった修平の父親の漁船が悪天候で難破し、不慮の死を遂げてしまったのだ。しめやかに行われた葬儀の最中、「父ちゃんは、死んだらん。葬式なんかするな!」と家を飛び出す修平。すっかり穏やかな海に向かって何度も父の名を呼ぶ修平を、先生はそっと抱きしめる。悲しみも冷めないある日、修平は島民にケンカを売られて無抵抗に殴られる先生の姿を目撃してしまう。憎しみは憎しみしか生まない、それを伝えたい先生の想いとは裏腹に、修平は強いと思っていた先生への信頼をすっかり失ってしまう。同じ頃、新任の先生が決まったという噂が島に流れる。

感想

「機関車先生」は、全編を通して、青年の心はほとんど描写されない作品でした。なぜ、島を出て生まれ育った場所に帰るのか、その理由も説明されていません。しかし、青年のうしろ姿は、鮮やかな余韻を残しました。自分に打ち勝つために教育者となった青年は、戦争で死んだ父と、島には帰ろうとしない母を思いながら、自分のルーツを求めて島にやってきました。そして、自分にはやらなければならないことがあると気が付いたときに島を去っていきました。「機関車先生」をとおして作家が描きたかったのは、青年の心の旅ではないかと思いました。

## 『赤毛のアン』でチャレンジ

有田 優花

わたしの選ぶ一冊

『赤毛のアン』 ルーシー・モード・モンゴメリ (1874-1942) 【カナダ】

わたしはこの課題をするにあたり、どのような本を読もうか迷っていました。ある日、いここに相談してみると、『赤毛のアン』を英語で書いてあり、簡単に翻訳できる本を持っていると教えてくれたので、その本にすることに決めました。わたしはもともと本は好きでしたが、赤毛のアンなどの本は読んだことがなく、一度読んでみたいと思っていた作品です。また、英語で書かれているところにも惹かれました。せっかくの英語の授業なので、自分で訳して読むことにチャレンジしてみようと思いました。

まず、わたしが手をつけたのは題名です。『Anne of Green Gables』と記されており、直訳すれば『グリーン・ゲートルズのアン』となりますが全く意味がわかりませんでした。インターネットで調べてみると、グリーン・ゲートルズとは「アンが住むことになるカスパード家の屋号」ということであることがわかりました。

そしていよいよ本文に突入したものの、辞書がてばなせませんでした。いくら簡単と言われても、英語の単語をほとんど調べないといけないわたしにとっては、大変なものでした。単語を調べたとしても、言葉にならなったり、意味のわからない言葉になったり……。その辺りは自分で臨機応変で乗り切っていました。作業が進まなく途中でしんどくなり、しばらく手をつけないでいた時期もありましたが、なんとか最後まで読みたかったので、続けることにしました。

この話を読んだ中でわたしが一番印象に残っている場面は、アンがアラン夫人のためにケーキを焼きますが、そのケーキには、バニラの瓶に入っていたのを塗り薬と気づかず香料として混ぜてしまっていました。アンは鼻かぜをひいていたので気がつかなかったのです。それに気づいたアンは傷つき、部屋に閉じこもって泣いていましたが、アラン夫人は怒るのではなく、やさしくなぐさめるところに人間の温かさを感じ感動しました。

わたしは、いまだにこの本を最後まで読み切れていません。いつ読み終わるかわかりませんが、根気よく続けていきたいと思います。この本を読み終わったら、また違う本にも挑戦してみようと思っています。

## あ　と　が　き

あと何年続けられるだろうかと思いながら始めた今年度の論集作成も、いよいよ完成の運びとなりました。年度が始まる前から考え抜いて計画を立て、新学期になって学生たちに順次指示を出し、夏休みに書き上げてもらい、秋に原稿を集め、そのあとみんなで必死に編集作業をしました。今年度はパソコン編集が巧みな学生の協力があまり仰げなかったため自分でやることも多く、時間ばかりが費やされました。今は時の早さに改めて驚かされます。

しかし大学から10万円の補助をいただけたことは、苦しい状況のなかありがたい励みにもなりました。おかげで個人研究費にも少し余裕ができ、念願のパソコンが更新でき、編集作業もいくぶん効率化できました。

この論集もまた例年と同じく、日本のみならず世界に配布し、本学図書館のリポジトリ・サービスを通じてインターネットで全文を公開する予定です。大阪教育大学を志す世界の人々に教育と研究の現場の情報を提供し、大学受験や留学の参考にしてもらえればと思います。また世界の研究者との国際交流にもささやかな貢献ができればと願っています。アメリカの大学などから献本を依頼されることもまもあり、知らないところで役に立っていることが驚きです。

今年はアジア方面に力をいれ、留学生の協力を仰ぎ、中国語で米文学研究室の活動紹介を作成しました。国際貢献のささやかな一助となることを願っています。

このインターネットで流される情報は、図書館が本を廃棄してしまうデジタルな時代になっても、生き続けます。万一送信母体が発信を停止しても、学生たちが思いを込めて書いた論文は、誰かのパソコンに保存されたデータとしてまた別のパソコンへと流れ、ちりぢりになりながらもネットの海を、いわば「千の風になって」吹き渡っていくことでしょう。

橋 本 賢 二

平成22年2月発行 (February, 2010)

---

**物語の魔力** ——欧米文学を再話して——

Enchanting Retold Stories

発行者 大阪教育大学 米文学研究室  
〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY  
(Faculty of American Literature)  
4-698-1 Asahigaoka, Kashiwara,  
Osaka, 582-8582 JAPAN.

編著 橋本賢二  
Editor & Author : Kenji Hashimoto

印刷所 株式会社アイジイ  
〒531-0072 大阪市北区豊崎7-7-7  
06-6371-0321

---



